

回覧													
----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

アクティブ長洲小

長洲町立長洲小学校だより
 令和3年1月27日 第17号
 文責 校長 川富 一弘

危機意識を保つのは難しい、けれど・・・県独自の緊急事態宣言発令中

毎日の報道で、九州でも福岡に次ぐ感染者数の熊本県。不要不急の外出自粛、マスク着用、手洗い、うがい、三密を避ける等、誰もが出来る範囲でこれらを守りながらやっている毎日ですね。このところの関心事はワクチン接種を受けられる時期がいつなのか、ですが、国の認可が下りて実際に受けられるようになるのはまだまだ数カ月先になるようですね。それでも年内にはおそらく接種できるとなれば、年内を目処に収束していくのかと少し光が見えてきたとも言えるでしょう。

学校では、全家庭に登校前の検温への協力をお願いしており、昨年6月から引き続き今もご協力いただいています。また、児童が下校した後の校舎消毒も担当の職員を中心に毎日行っています。さらには、これまで置いていた玄関の手指消毒に加え、サーマルカメラ(児童検温装置)を新たに設置して来校者すべてに検温を呼びかけさせていただいています。コロナ禍で何もかも中止するのは簡単なことです。しかし、そうではなく、できる限りの感染予防をしながら、可能な範囲で通常通りの学校運営を行う、どうすれば実施できるか、これを基本的な考え方でアクティブに進んでいく長洲小です。先日機内でマスクをしないことで逮捕される事件もありましたが、危機意識を高く保つことの難しさとともに、新しい生活様式が常識化するまで、つまり「当たり前」になるまでもうしばらくの辛抱が必要なようです。

約10か月にもなるコロナ感染予防、職員も子供達も大変なストレスの中で毎日を過ごしています。どこかで息抜きが欲しい気もしますが、みんながんばっていますから弱音は吐けません。まずは緊急事態宣言が解除されることを願いながら毎日を大事に過ごしています。



給食週間を迎えています



1月24日～30日までは全国学校給食週間です。本校もこの間を給食週間として給食委員会が中心となって給食に対する感謝の気持ちを表す週間としています。

給食そのものは明治22年に山形県で始まり、今やほとんどの小学校、中学校で給食が行われています。今や食育という概念もあり、食に対する関心も多様化してきたせいか、献立はずいぶん多国籍になったものだと感じています。例えば、スコッチエッグ(スコットランド)、棒棒鶏サラダ(中国)、チリコンカン(アメリカ)、ボルシチ(ロシア)など世界各国のメニューが給食に出てくるのです。今や学校給食もグローバル化しています。そんな給食を支えてくださっている荒尾市給食センターですが、県内最多の量(荒尾市13校、長洲町6校、荒尾支援学校)を作っております。資材の仕入れ、調達から調理、片付けと基本的な作業はもちろん、食物アレルギーや異物混入への対応、何より安心して安全、なおかつおいしい給食となれば相当なご苦労があるはず。感謝の気持ちを忘れず有り難くいただきますと思います。

多様性について考えよう



本校の学校運営のキーワードは「主体性」が一つ目、そして「多様性」を2つ目に掲げています。この多様性という言葉は、決して新しい言葉ではありませんが、ここでなぜ「多様性」を重視しているのか述べたいと思います。

この多様性という言葉が特にクローズアップされるようになったのは、LGBTと呼ばれる性認識の理解が広まったことによるものです。どちらかと言えば、タブー視されてきた領域ですが、今では、法の整備も進み、性自認の多様性を受け入れていく世の中へと動いています。学校もこうした流れに乗ってトイレや更衣室等の設備面で配慮が

話題になりつつありますし、もしかしたら誰にも打ち明けられず悩んでいる子供がいるのかもしれない、という視点は常にもっていなければなりません。ちょうど今月は、性に関する指導月間として、各学級で性教育を取り扱う月間にしています。男女の違い、性差を知ることによって尊重し合うための学びとなります。

さて、話を元に戻しますが、この「多様性」とはどんな意味をもっていると思いますか。十人十色という言葉もありますが、確かに個々の考え方や感じ方は人それぞれです。だからといってみんなそのまま受け入れられるというわけではありません。それぞれの違いは認めるものの、認められても受け入れられる場合とそうでない場合があります。それは、その多様性の上位のルールがあるからなのです。

教室を例にとると、30人学級であれば、30とおりの子供達がいいます。30人それぞれの感性で授業に参加し、発言もしますが、個々の言動が授業に深まりを持たせるときに、多様性というキーワードの意義が表れます。逆に友達の学びを邪魔する発言や態度があればそれは受け入れられませんし、当然許されません。

少なくとも昭和の学校は、みんな一緒であることを目指して一斉指導を受けてきました。画一的にそろえることで生産性を上げなければいけない高度経済成長期の学校の在り方でした。しかし今は、互いの個性を寄せ合ってより高いもの、広いものへと学びをつなげていく時代なのです。憲法では、公共の福祉(みんなの幸せ)に反しない限り、個人の自由と権利が認められているのもそういうことなのです。

6年生卒業制作～一先窯2代目山口友一・博子先生に学ぶ～

6年生も卒業に向かって動き出しました。26日に山口先生(5年内田教諭の実弟)をお呼びして小代焼に挑戦しました。冒頭に小代焼についての説明があり、その後作り方を学びました。いつもは元気いっぱい6年生が真剣に話に聞き入り、その後の作業も集中して取り組んでいました。山口先生が用意した粘土は長洲産の粘土ということで、余計に子供達の意欲も湧いてきたようでした。

余談ですが、この山口友一先生、私が六栄小勤務時代、5、6年生時の担任をしていました。先代(山口耕三氏)が築かれた窯を受け継ぎ、今や若手でありながら全国にファンがいる陶芸家として活躍しておられます。教え子が本校児童に指導している様子を見て、目頭が熱くなりました。感動的な出会い、こうして人と人がつながる教師という仕事の魅力をあらためて感じた一時でした。

さて、作品は2代目山口先生夫妻が持ち帰られ、割れないように仕上げを施して乾燥させた後、素焼き、釉薬を掛けて本焼きをして完成します。卒業式前には届くそうです。皆さんもぜひ一先窯(78-5631)へ足を運んでみてください。

